松江市史講座「市民と語る松江の自然」

自然環境編「第２章　気象と気候」

島根大学法文学部　田坂郁夫

◎　執筆者

田坂郁夫（島根大学法文学部）　第１～３節

浜田周作（元松江地方気象台長）　第２，３節

◎　これまでの市誌，市史における気象・気候の内容

「新修松江市誌」（1962，別図参照）

1．松江地方気象台：気象台の沿革と機構，県内観測所の解説

2．山陰気候区：中国地方を５つの気候区に分け（和達監修「日本の気候」による），島根・鳥取両県の大部分を占める山陰気候区に含まれる松江の特徴を概説

3．松江の気候：気温，降水，降雪，湿度，風，天気日数の各月平均値，各月の最高・最低気温の記録を示す表とその解説。その際，中国地方の気象観測所（浜田，広島など），北陸・東北地方の気象観測所（金沢，秋田，福岡など）と比較

4．気象災害：江戸以降の主な気象災害（22 件）について期日と災害種別を示す表と極めて簡単な解説

5．松江の四季：四季の特徴と特徴的な気象現象（フェーン，黄砂），生物季節の説明

・頁数（16 ページ）が少なく，それぞれの記載が極めて簡潔（すぎる）

・現象の背景，原因などの説明がない

・説明の補助資料が表だけ（図は松江，浜田，広島の気温，降水量の年変化を示す１枚だけ）で，直感的に理解しにくい

◎　今回の松江市史で目指したもの

・［そうだね］から［なるほど］

松江に長年住んでいると，気候の特徴や季節の現象は経験的に分かっている。しかし，その背景，要因・原因まで理解しているとは限らない。今回は現象の解説だけでなく，「なぜそのような現象が起きるのか」という要因・原因を分かりやすく説明するように心がけた

・視野を広げる

松江の特徴を日本各地の諸都市と比較し，全国的な視野で考える

・身近な現象から理解する

気象・気候の特徴を気温，降水量など個々の要素に分解して述べるのではなく，四季の変化，季節季節に現れる身近な現象を通して理解する。

・直感的に理解する

表（文字・数字だけ）だけでは，季節の変化や地域の違いが分かりにくい。ここでは，表をグラフに直し，天気図や解説図を使うことによって，より直感的に理解できるようにした

・気候の歴史を理解する

従来取り上げられることの少なかった気候の歴史についても，１つの節として解説した

・気象災害を理解する

松江の気象災害の特徴を理解し，代表的な災害である大雨，大雪，大雨の対極としての干ばつについてその背景から詳述し，理解できるようにした

◎　本書で書けなかったこと（資料編で取り上げる予定）

・松江地方気象台を含め，松江での気象観測の歴史や現在行われている観測について

・松江（日本）の気候を世界の中で比較して考える

・平年値，極値（最高・最低の記録）などの詳細な数値データ

・生物季節

・気象災害の一覧

・古文書（古日記）から復元される過去のお天気

・気象観測記録

◎　「新修松江市誌」（1962）の一部

三、松江の気候

この項で述べる気候要素は松江においては昭和十六年から三十年の十五年間、その他の地方は大正十年から昭和二十五年の三十年間の平均値を示している。

(一) 気温　松江の月平均気温は八月が最高で二六・五度であり、岡山（八月二七・一度）・広島（八月二六・九度）よりやや低いが、浜田（八月二六・〇度）・島取（八月二六・二度）より高い。また二月が最低月で三・六度であり、広島（一月三・七度）・浜田（二月四・九度）より低いが、島取（二月三・二度）よりやや高い。過去における最高気温は昭和十九年八月三日の三七・一度で、最低気温は同十七年二月十四日の(-)八・五度であった。四月の下旬から五月上旬ごろと十月下旬ごろの春秋二回が年平均に近い気温を示している。

年平均気温は一四・一度で島取（一三・九度）・金沢（一三・三度）・新潟（一二・八度）より高く、浜田・岡山・広島（共に一四・六度）より低い。しかし京都（一四・三度）・名古屋（一四・二度）・東京（一四・三度）に近いから気温に関する限り、わが国の平均的な地位を占めている。

なお、観測年を比較的新しく昭和十六年から三十四年の十か年をとった場合、年平均気温は前の場合よりやや高くなって一四・五度となり、月平均最低気温の月が二月から一月と一か月早くなり、一月の平均気温も四・二度と高くなっている。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
松江	3.7	3.6	6.7	11.8	16.6	20.7	25.0	26.5	21.9	15.7	11.1	6.3	14.1
浜田	5.0	4.9	7.4	12.0	16.4	20.3	24.9	26.0	21.8	16.3	11.9	7.8	14.6
広島	3.7	4.2	7.1	12.5	17.3	21.2	25.8	26.9	22.8	16.6	11.0	6.3	14.6

自然環境編「第３章 生物」

島根大学非常勤講師　佐藤仁志

◎ 執筆者
佐藤仁志、枚村喜則（故人）、越川俊樹

◎ 協力者
岩田貴之、森　茂晃、林　成太、渡辺正巳、富川康之

◎ **生物編のくふうあれこれ**

第 3 章生物においては、いくつかのくふうを取り入れ執筆を行った。まずその概要等について紹介する。

〔生物分野の特性〕
- 生物には、動物や植物、菌類などがあり、さらに動物では哺乳類・鳥類・両生類・は虫類・魚類・貝類・昆虫類・クモ類など、非常に多くの分野が存在する。
- これらの生物について、すべてに精通した博物学者は存在しないこと。
- 島根県内には、これら生物について研究している人が極めて少ないこと。但し、昆虫類、鳥類、植物等はそれなりに存在。

〔松江市史における生物編の編集方針〕
- 当初、松江市史編集委員会からの依頼は、植物・陸生動物・水生動物の３つの分野に大別し、それぞれ枚村喜則、佐藤仁志、越川俊樹の３名が担当するよう依頼された。
- 一般的な市町村誌では、植物・動物などそれぞれの分類群ごとにその概要や特徴などを記載するのが一般的。
- しかし、松江市史通史編における自然環境分野においては、松江市の長い歴史の中での自然環境の位置づけなどがわかるようなものとし、分類群にこだわずに一般の市民に分かりやすいものとするよう強い要請があり、途中から編集方針を変更せざるをえなくなった。
- とはいうものの、このような編集の取り組みは前例がなく、その対応に苦慮した。

〔松江市史生物編におけるくふう〕
- 新たな編集方針に基づき、次のような対応を行った。
- まず、動物や植物等のカテゴリー区分ごとの記述をとりやめ、松江の自然を特徴づける 3 つの地域、具体的には①私たちの生活をはぐくむ里山、②「水の都松江」とそこに見られる生き物たち、③魅力いっぱいの島根半島と日本海の自然の 3 つの地域を取り上げ、それぞれ節に分け記述した。
- 第 1 節の中に、特別に「自然環境の変遷」の項目を設け、縄文時代以降の人の歴史と自然環境の変遷について記述してみた。また、「里山の恵みと食生活」の項目を設けるなど、できるだけ市民が親しみやすい内容とした。

- 第３節の中に、「松江藩の産業振興とその名残」についてもふれ、島根半島では特にアブラギリがよく目につくことなどを紹介した。
- さらに、「松江の自然と食生活」などの項目を掲げ、宍道湖七珍の他に新七珍の提案なども行ってみた。
- 以上の他に、コラムを多く掲載（生物では 6 点）し、嫁が島のマツはもとはなかったことや、水位の上昇等によりマツの生育が危惧されること、ウップルイノリが地方名ではなく標準和名であることなどを分かりやすく紹介した。

◎ **各節の概要**

〔第１節：私たちの生活をはぐくむ里山〕
- 「里山」とは、単に里の山をさすものではなく、様々な人の働きかけを受け自然環境が変化してきた農地や裏山、草原、集落などを含むものであることを述べたうえで、植生には自然植生と代償植生とがあるが、里山のほとんどは人の影響により植生が変化した代償植生であることを記した。
- 一方、天狗山のブナ林など自然植生のなごりも散見され、それらは松江市における貴重な植生であることも述べた。
- 里山の動物についてもその概要を述べ、松江市竹矢町の名前がついた、カタツムリの１種チクヤケマイマイの存在なども紹介した。
- さらに、人の関与が弱まってきたことによる里山の荒廃や外来生物などによる、希少な動植物の危機についても言及している。

〔第２節：「水の都松江」とそこに見られる生き物たち〕
- 広大な弱汽水湖である宍道湖は、全国的にも珍しい特異な湖であることをまず述べた。
- そこには、シンジコハゼなどの珍しい生物が存在することや、野鳥の宝庫となっておりラムサール条約登録湿地にもなっていることなどにも言及した。
- 宍道湖の生物を代表するヤマトシジミが、なぜ日本一の漁獲を誇っているかや、その危機などについてもふれ、水質の浄化活動の大切さなどを訴えた。
- さらに、宍道湖と中海の生物の違いなどにもふれた。
- また、水の都松江には欠かせない堀川の生物については、その変遷等について述べた。

〔第３節：魅力いっぱいの島根半島と日本海の自然〕
- 島根半島の植生の特徴等にふれ、自然植生の名残がみられることなどについて紹介した。
- 動物では、近年分布域を急速に拡大しつつあるホンシュウジカについてふれたり、クマタカやハヤブサなどの希少な猛禽類が生息していること、珍しいヒダサンショウウオが見られること、標高のある程度高い場所に生息しているタゴガエルが、海岸近くまで生息していることなどを紹介した。
- 「海流と生き物たち」の項を設け、魚類やウミガメ類、アオイガイなどについて紹介するとともに、「磯の生き物たち」の項では、市民に親しまれている「ニナ貝」などについても取り上げた。

（以上）